

ルーブリックの有用性—学生のフィードバックより—

橋本 泰央*、郡 佳子*、佐藤 良太*、川崎 一郎**

The usefulness of Rubric : Feedback from students

* 帝京短期大学、 ** 帝京平成大学

Yasuhiro Hashimoto*, Yoshiko Koori*, Ryota Sato*, Ichiro Kawasaki**

英文要旨

A rubric was used to evaluate how students performed in the subject taught by the author. The students were asked to make a self-assessment of their learning using a rubric after the class and to provide feedback on whether they used the rubric as a reference. The gaps between students' self-assessment and the teacher's evaluations were analyzed. The rubric can be a useful tool to enhance the quality of teaching by comparing students' self-assessments with the evaluations made by their teacher.

要旨

ルーブリックを作成して学生の評価に用いた。課題に取り組んだ学生は、課題をこなす上で事前配布されたルーブリックが参考になったと回答した。また学生はルーブリックを用いて課題に対する自己評価を行った。その結果学生と教員の意識の差が明らかとなり、指導上の課題が明らかとなった。ルーブリックは教育上の課題を明らかにし、授業を改善するための道具としても活用が可能である。

1 はじめに

学士課程教育に求められる質的転換の一つとして、学修成果の担保が挙げられる(文部科学省, 2012)。そのためこれまでは研究の対象になりにくかった大学における学習方法の改善や学習成果を評価する方法の研究・開発は、今後学士課程教育の取り組むべき課題といえる。学習方法は従来型の知識伝達型の学習方法から学生が主体的に問題を発見し解を見出していく能動的学修(アクティブ・ラーニング)への転換が求められており、アクティブ・ラーニングに取り組む大学も増えている(河合塾, 2014)。同時に学生の学修成果を具体的に把握する方策も模索されなくてはならない。

学生の学修成果を具体的に把握する方策の1つとしてルーブリックを活用する方法がある。ルーブリックとは「ある課題について、できるようになってもらいたい特定の事柄を配置するための道具」(ステーブンス・レビ 2014, p.2)である。ルーブリックは学生に対する課題と、学生の課題への取り組みに対する評価尺度、評価観点、評価基準の4つの基本的な要素から構成されている。評価尺度は与えられた課題に対する学生の達成の度合いを示している。評価観点とは課題をさらに細かい要素に分解したものである。評価観点

を示すことで課題をこなすために教員が重視している側面を学生に明示することができる。評価基準とは評価観点ごとの到達度合いを定めたものである。

ルーブリックを活用することで以下の効果を期待できる。まず学生の数が増えても、学生の学修程度を同一の評価観点から同一の評価基準に沿って評価することができる。そして学生に対して素早いフィードバックをすることが可能となる。またあらかじめ評価観点や評価基準を学生に明示することで、課題の達成に向けた学生の主体的な動きを期待することができる。さらに学生に対して学生の学修成果および学修における課題を示すことができる。

筆者は担当する授業において昨年度よりルーブリックを作成し、課題の評価に利用している。今年度の授業ではルーブリックの活用について学生からのフィードバックを得た。そこで、ルーブリックの作成上の注意点および学生のフィードバックから感じたルーブリックの有用性について報告する。

2 ルーブリックの作成法と作成上の注意点

ステーブンス・レビ(2014)はルーブリックを作成する手順として「振り返り」、「リストの作成」、「

ループ化と見出し付け]、「表の作成」の4段階を挙げている。

1段階目の「振り返り」は学生に課題を与える理由、学生に対して期待するものなどについて教員が振り返る作業を指し、ループリックを作成する前に行う。「振り返り」は当該講義のみならずカリキュラム全体の中で課題が占める位置づけを明らかにすることを目的としている。

2段階目の「リストの作成」は課題を通して学生に身につけさせたい技能を書き出す作業を指す。リストの作成を通して課題の具体的内容、学生の到達目標を明らかにすることができる。またリストを作成することで課題を十分にこなした学生に期待される行動例が明らかとなる。さらに教員が行うべき指導内容を明らかにすることにもつながる。

3段階目の「グループ化」とは上記の2段階で出てきた考えをまとめ、類似した到達目標をグループとしてまとめる作業を指す。「見出し付け」とはまとめたグループに対して名前を付けることである。見出しが付けられたそれぞれのグループが評価観点を構成する。

4段階目の「表の作成」は、上記の手順を踏んで作成されたリストとグループを用いてループリックの形式に整える作業を指す。

上記の手順を踏んで今年度筆者が作成したループリックの一部を図1に示す。

1行目の「優秀」「良」「発展途上」が評価尺度、1列目の「配布資料」が評価観点、そして最も大きなスペースを占めている部分（2行2列目から4列目まで）が評価基準である。

ループリック作成上の注意点を3点示す。

1つ目の注意点は学生に身につけさせたい技能に優先順位を付けること（評価の観点を絞ること）である。学生に対してあまりに多くの技能、行動を求めすぎると、学生の負担が増えすぎて結局何も身につかないということになりかねない。また指導すべき事柄が増えすぎて、教員が授業中に指導しきれない可能性も生じてしまう。カリキュラム全体を見渡したうえで学生に身につけさせたい技能に優先順位を定め、指導の焦点を絞ったうえで、ループリックの評価観点を作成する必要がある。

2つ目の注意点は評価尺度に用いる用語にネガティブな用語を使用しないことである。ループリックによる評価を受け取った学生がやる気をなくすことのないよう、教育的配慮が必要である（スティーブンス・レビ，2014）。

3つ目の注意点は「優秀」の評価基準を作成する際に、授業を受けた学生が到達し得る基準に設定することである。評価尺度における「優秀」の基準は、学生に対して何が評価され、何が評価されないのかを示す基準である。その際、授業を受けた学生が到達し得ない目標を記してはいけない。一生懸命に取り組んだにも関わらず「優秀」がもらえないと、学生のやる気をそいでしまうからである。また教員は学生が目標を達成するための手立てを授業内で行わなくてはならない。

以下にループリックの使用に対する学生のフィードバックを記す。

	優秀	良	発展途上
配布資料	<input type="checkbox"/> テーマが明快である。 <input type="checkbox"/> 深く掘り下げて調べられている。 <input type="checkbox"/> 6つ以上の参考文献、引用文献が示されている。 <input type="checkbox"/> 引用のマナーが守られている。 <input type="checkbox"/> 指定された書式を守っている。	<input type="checkbox"/> テーマが概ね絞られている。 <input type="checkbox"/> よく調べているが、もう少しテーマを掘り下げることができるとさらによい。 <input type="checkbox"/> 参考文献、引用文献の数が3～5つである。 <input type="checkbox"/> 引用のマナーが一部守られていない箇所がある。 <input type="checkbox"/> 概ね指定された書式に従っているが、一部外れた箇所もある。	<input type="checkbox"/> テーマが絞り切れていない。 <input type="checkbox"/> 調べ方、まとめ方が不十分で、情報量が少ない。 <input type="checkbox"/> 参考文献が2つ以下である。 <input type="checkbox"/> 引用のマナーが守られていない。 <input type="checkbox"/> 指定された書式から外れた箇所が多い。

図1 「配布資料」に関するループリック

3 ルーブリックの使用に対する学生のフィードバック

対象

今年度ルーブリックを使用した授業の受講者はライフケア学科柔道整復専攻2年生の昼間部61名、夜間部28名、合計89名であった。学生は数名ごとの班（昼間部は5, 6名で1班、夜間部は4名で1班とした）を形成し、臨床現場でよく遭遇する外傷について調べ、資料2種類（配布資料と発表用パワーポイント資料）をまとめ、発表を行った。班の総数は昼間部が12、夜間部が7であった。

方法

ルーブリックは学生が配布資料の作成に入る段階で配布し、課題に対する評価尺度、評価観点、評価基準を示した。ルーブリックを使用することで学生の自己評価と教員による評価がどの程度一致するかをみるために、学生は発表会終了後にルーブリックの一部（「配布資料」について）に対して、班ごとの自己評価を記入した。教員による評価は事前に提出された配布資料を基に発表会の前になされた。ルーブリックの得点化に際しては「優秀」を3点、「良」を2点、「発展途上」を1点とした。また学生はルーブリックが作業を進めるうえでの参考になったかどうかを回答した。回答は「まったく参考にならなかった」を1点、「少し参考になった」を2点、「おおいに参考になった」を3点として集計した。そして「まったく参考にならなかった」と回答した場合は、その理由の記述を求めた。

結果

表1に配布資料に対する班ごとの学生の自己評価と教員の評価を示す。

「テーマが絞られているか」についての学生の班ごとの自己評価の平均値は昼間部が2.3点、夜間部が2.6点であった。昼間部・夜間部の学生ともに教員評価とほぼ

同様の評価を下していた。

「深く掘り下げて調べられているか」の平均値は昼間部が1.8点、夜間部が2.0点であった。昼間部、夜間部ともに十分に深く掘り下げて調べることができなかつたと感じていたようであった。一方教員による評価の平均値は昼間部が2.5点、夜間部が1.7点であった。昼間部については学生の自己評価よりも教員による評価の方が高く、逆に夜間部では低かった。

「参考文献の数は十分か」の平均値は昼間部が2.5点、夜間部が2.1点であった。昼間部の方が夜間部よりも自己評価が高かった。教員の評価もそれぞれ2.5点、2.0点であり、学生の自己評価とほぼ一致した。

「引用のマナーを守ることができたか」の平均値は昼間部が2.7点、夜間部が2.6点であった。一方教員の評価の平均値は昼間部2.3点、夜間部2.1点であり、昼間部・夜間部ともに学生の自己評価よりも低かった。

「指定された書式を守ることができたか」の平均値は昼間部、夜間部ともに2.7点であった。教員の評価の平均値は昼間部が2.8点、夜間部が2.9点で、学生の自己評価とほぼ一致した。

「授業中に配布したルーブリックは作業を進めるうえで参考になりましたか」に対しては昼間部、夜間部ともに全ての班が「おおいに参考になった」「少し参考になった」と回答し、「全く参考にならなかった」と回答した班はなかった（図2）。

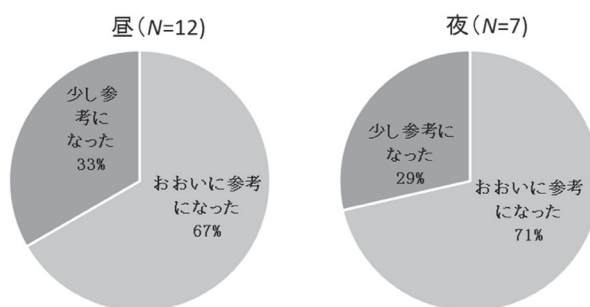


図2 資料を作るうえでルーブリックが参考になったか

表1 配布資料について班ごとの自己評価と教員による評価の平均

	昼 (N=12)		夜 (N=7)	
	学生評価	教員評価	学生評価	教員評価
テーマが絞られているか	2.3	2.5	2.6	2.4
深く掘り下げて調べられているか	1.8	2.5	2.0	1.7
参考文献の数は十分か	2.5	2.5	2.1	2.0
引用のマナーを守ることができたか	2.7	2.3	2.6	2.1
指定された書式を守ることができたか	2.7	2.8	2.7	2.9

考察

班の数が少なかったため統計的な処理は加えていないものの、学生の自己評価と教員の評価の間にズレがみられたのは「深く掘り下げて調べられているか」と「引用のマナーを守ることができたか」の2項目であった。

「深く掘り下げて調べられているか」について学生の自己評価と教員の評価との間にズレが生じたのは、教員が学生に対してどの程度「深く掘り下げて」調べことを求めていたのかが学生に伝わっていなかったためと考えられる。どの程度調べれば「深く掘り下げ」たことになるのかが不明確であったために、昼間部の学生は自分たちが調べた内容に対して不十分ではないかという不安を抱き、自己評価が低くなったものと考えられた。一方夜間部は鍼灸の資格を取得する大学において卒業研究を経験している学生が多い。そのためどの程度調べれば「深く掘り下げ」たことになるのかについて、学生なりのイメージを持っていたものと推測された。今回のような課題を学生に課す場合には、どの程度調べるべきかを例を用いつつ学生に明確に示すことが必要であろう。

「引用のマナーを守ることができたか」については昼間部、夜間部ともに教員の評価よりも自己評価が高かった。この結果は引用を記すことに対する学生の意識が教員の求める水準に達していないことを表していると考えられる。近年ではインターネット環境の普及により大学のレポートにおける文章の盗用、剽窃が問題となるケースが多い。盗用、剽窃の予防には各大学が力を入れているが、本専攻の学生に対しては研究倫理を教えるカリキュラムが存在しない。その意味で本授業内で引用時のマナーについて学生に教える意義は大きく、責任は重大と言える。盗用、剽窃に対する学生の意識を高めるように、学生への教育を徹底する必要があるだろう。

学生からのフィードバックは学生が課題をこなす上でのループリックの有用性を示している。何を（評価観点）、どの程度（評価基準）行えばよいのかがループリックに明記されていることが学生が作業する上での目安になったと考えられる。つまりループリックは学生が作業する上での道しるべとして活用することが可能である。また今回のようにループリックを用いて学生に自己評価を求め、その結果と教員の評価とを比較することで、学生と教員の意識の差を明らかにすることができる。つまりループリックは教員が教育上の課

題を明らかにし、授業を改善するための道具としても活用が可能である。

引用文献

Dannelle D. Stevens & Antonia J. Levi (2013). *Introduction to Rubrics: An Assessment Tool to Save Grading Time, Convey Effective Feedback, and Promote Student Learning*, Second Edition. Stylus Publishing: Sterling. (ダネル・スティーブンス、アントニア・レビ、佐藤浩章監訳、井上敏憲・俣野秀典訳 (2014). 大学教員のためのループリック評価入門 玉川大学出版部)

河合塾 (2014). 2013年度 大学のアクティブラーニング調査報告書. http://www.kawaijuku.jp/research/file/2013_houkokusyo.pdf (2016年10月28日)

文部科学省 (2012). 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて. http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afiefieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf (2016年10月28日)